

教宣 せぶん

7月からの希望調査等面談

代理店としての身分をことさら強調する会社

デスクは来客スペースに設置？

3月は卒業や入・進学が決まる季節です。職場では公立高校の合格発表の翌日、IPの方のお子さんが合格したという知らせを聞いた担当のKPが「おめでとう」と声をかけ、ガッチリと握手している光景が見られました。また、我が家の子供の進学に際し、隣席のASPの方から「ウチの子供が使用すると思って買った電子レンジがほとんど未使用のままあるんだけど、もう買っちゃった？」と声をかけてもらい、譲ってもらいました。

私の職場はいわゆる“ひとり職場”で、同じ立場で、同じ仕事をしている者はいませんが、世間話やプライベートな会話ができる、働く仲間がたくさんいます。「おはよう」と言って、言われて一日の仕事が始まり、「お疲れ様でした」と言って、言われて家路に着くという環境があります。当たり前といえば当たりの光景ですが、組織のなかで働いていく人間にとって、こうした職場の一体感が感じられることや、人間的なつながりを感じながら働いていけることはきわめて重要なことです。5年に及ぶたかいたかいを“ひとり職場”で経験してきたからこそなおのこと、こうした職場の人間的なつながりがいかに大切なのかを痛感しています。

今回の面談のなかで、問答集まで持ち込んで示してきた会社の考え方は、こうした、いま私たちの職場に、当たり前にある人間的なつながりや一体感を、私たちから奪い去るものだといわざるを得ません。職場から私たちを隔離し、働く仲間とのふれあいを奪い、孤独感からいずれ会社から去っていくことを期待しているのではないかとさえ感じます。“発案者”は自らがこうした人間的

なつながりを断ち切られたなかで、健康的に働いていけるか、イメージしてみるべきです。

私たちは片方で専門代理店の従業員になりますが、片方では本体の社員です。「正社員の身分のまま、代理店に出向し、引き続き保険募集をおこなう」というのが和解の骨子・精神ですから、正社員としての身分や立場が感じられるような働くポジションをつくるのも会社の使命のほうです。

制度廃止が通告された後に、課所長や部支店長が私たちに事の顛末を説明する場が設けられましたが、その際も会社側は問答集を持って臨んでいました。今回の件も、労使交渉で話し合われる問題でまだ会社窓口からはなんの考え方も示されていない段階ですが、面談に訪れた担当課長がすでに問答集まで持っていることを考えれば、会社は私たちを完全に“代理店”として整理しようと考えていることが容易にうかがえます。

本紙前号が掲載されると、OBである先輩からさっそく連絡が入りました。「デスクが来客スペースに置かれ、支社の執務スペースに入れられないなんてとんでもない話だぞ。人権的にも許される話ではない。お前さんたちは社員なんだから社員として扱われなきゃ絶対におかしい。いつでも本社前に駆けつけてやる」と激励されました。違うOBからも「何の良心の呵責もない会社だ。これからは人権闘争になる」「セキュリティーやファイアーウォールという言葉は代理店や顧客など社外の人間に使う言葉であって、社員に使う言葉ではない」「出向者が本体の社員ではないという整理なら、出向しているパートナーズの社長は支社の執務スペースに入れられないのか。入っているではないか」と、立て続けに3通のメールが送信されてきました。このたたかいを支えてくれた方たちも、私たちが完全に“代理店”として扱われることに大きな怒りを持っています。

デスクの設置場所は、今後、私たちが“人間らしく”、“誇りを持って”働いていけるかが問われる、重要な問題です。